

真船るのあ

胸さわぎの視線



角川ルビ



むな
胸さわぎの視線
まふね
真船るのあ

角川ルビー文庫 R45-3

11444

平成12年4月1日 初版発行

発行者——角川歴彦

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3

電話/編集部(03)3238-8697

営業部(03)3238-8521

〒102-8177 振替00130-9-195208

印刷所——暁印刷 製本所——本間製本

装幀者——鈴木洋介

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

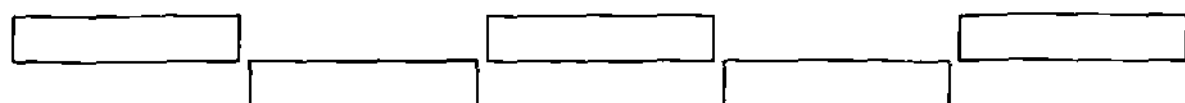
落丁・乱丁本はご面倒でも小社営業部受注センター読者係にお送りください。

送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN4-04-437003-6 C0193 定価はカバーに明記してあります。

©Runoa MAFUNE 2000 Printed in Japan

本体 476円



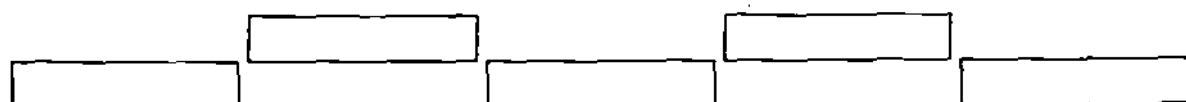
目次

胸さわぎの視線5

カタルシスの向こうに107

あとがき213

口絵・本文イラスト 氷栗 優



胸さわぎの視線

真船るのあ

11444



角川ルビー文庫

胸さわぎの視線

今日も一日、無事に仕事が終わった。

精神的重圧から解放された彼、安曇慧は軽やかな足取りで仕事場である「喫茶館」を後にした。そのまま歩けば十分ほどの距離にあるマンションへ戻る道すがら、スーパーに立ち寄って野菜や果物などを買い込む。

人目を引くほどの美貌に色素の薄い髪を肩まで伸ばし、細身で華奢な印象の彼がカートを押して買い物をしていると、周囲にいる主婦たちにはひょっとしたら美少女だと思われるかもしれない。

安曇慧、職業、占い師。

まだ十九歳という年齢の彼が、家賃十五万の高級マンションに住み、まだ八歳になったばかりの弟を抱えて立派に生活していると聞いたら、大概の人間は驚嘆するだろう。

三十分、五万円という高額な鑑定料にもかかわらず、予約を入れてくる客は引きも切らず。つまりはそれだけ彼の占いは当たるといふ証拠。

が、その的中率には当然のごとく秘密があるのである。

——今日はハンバーグにするかな………翼が食べたがってたし。

夕食のメニューを思案しながら精肉売り場へ行き、牛豚合い挽き肉に手を伸ばす。と、隣では同時に若い主婦が同じ品物に手を伸ばしたところだったので、慧はまるで電流にでも触れたかのように激しく反応して右手を引いた。

その様子に、主婦がいぶかしげに彼を見上げながら去っていく。

彼女の姿が見えなくなると、慧は自分の右手を見つめながら重い吐息をついた。が、気をとりなおしてレジで精算を済ませ、ビニール袋を下げて再び家路へと着く。

——あぶないあぶない、またうっかり他人の未来を覗き見するところだった。と、内心胸を撫で降ろす。

不用意に他人に触れられない人生を送らなければならなかったのは、慧が生まれ持っていた、ある特殊能力のせいである。

それ、はリーディングと呼ばれ、能力者によってさまざまな方法があるが、慧の場合は手で触れたものや人から、そこに刻み込まれた過去や未来の情報を読み取ることができるのだ。

かつては超能力少年として世間を騒がせた彼だったが、今はこうして占い師として自分の特殊能力をカムフラージュし、ひっそりと暮らしている。

しかしその秘密を知る者は、襖館の経営者である従兄弟の水原と、その補佐を務める五十嵐しかない。

いや、いなかったと言うべきか――。

――そう言えば、そろそろ来るころかな……………。

問題の相手の顔を思い出すと、自然に眉間みけんに縦皺たてじわが寄ってしまふ。

神出鬼没しんしゅつきぼつな敵は、三日と空けず大抵たいてい突然に慧の目の前に現れるのだ。

そんなことを考えながら、オートロック式のマンションのエントランスを通り、エレベーターを三階で降りてから自分の部屋である303号室のインターフォンを押す。

『おう、おかえり!』

インターフォンの向こうからは、聞き覚えのある声が威勢いせいよく返事を返してくる。

……………そう、ちょうどこんなぐあいに。

――ビンゴ……………。

額に手を当てて苦悩しているうちに、中から鍵かぎが開いて問題の男がぬつと顔を出す。

下から見上げるほどの長身に乱雑に伸ばした髪を後ろに一つに束たばねた彼、有馬洸ありま こういち一はくわえ煙草たばこのまま、不明瞭ふめいりょうな言葉を発する。

「今日は意外と早かったな。風呂ふろにするか? それとも飯にするか?」

と、一見ジャンル探検隊のようなワイルドな風貌とは裏腹に、まるで新妻のような口をきく。

見ると右手におたまを握り締め、慧のエプロンを勝手にしめている。

その不似合いないでたちを一瞥し、慧は再び右手を額に当てて呻いた。

「うちは禁煙だと、前に言ったはずですよ」

「換気扇の下で吸ってるって。まあ、とにかく上がれよ」

「言われなくても上がりますよ。ここは俺の部屋なんですから」
と、慧はいまいましげに後ろ手で玄関を閉め、部屋へ向かう。

「ただいま、翼」

「あ、おかえりなさい！」

リビングでテレビを見ていた翼が、たっと走って腰にしがみついてくる。

「あのね、きょうのおやつはね、こーちゃんがおしえてくれたウニプリンをたべたんだ」

「……………ウニプリン……………」

びっくりと慧の眉が反応し、有馬が慌てて翼の口を大きな手で塞いでいる。

「つ、翼っ、それはないしょだって言っただろうが！」

「あ、そっか〜ごめ〜ん」

「……………なんですか、そのウニプリンってのは？」

迫力のある微笑を浮かべる慧にじりじりと追いつめられ、有馬はしかたなく白状する。

「……………いや、その……………プッチンプリンに醤油をかけて食うと、ウニの味になる……………」

「うんてな、ははは」

予想通りの答えに、慧は沈黙する。

この男は、こうした彼独自で考え出したおかしな食べ方を翼に教えるので、兄である慧としては非常に迷惑しているのである。

「俺の大事な弟に、そういうおかしなものを食べさせないでくださいと、いったい何回お願いすればわかっていただけるんですか？」

「俺がガキの頃は、もっとやばいもん食ってたぜ？ 合成着色料ばりばりのチュウチュウアイとか、駄菓子とかさ。子供ってのは身体に悪いもんほど欲しがるもんなんだ」

「言い訳になってませんね」

まったく悪びれる様子もない相手に、なにを言っても無駄だというのはもう骨身に染みてわかってはいるのだが、こうして目の前に立たれると自然と毒舌が口を突いてでる。

そう、翼でさえ、彼らが仲がいいのか悪いのか、本当のところはわからないのだ。

会えば喧嘩ばかりの二人が、実は友達以上恋人未満な関係だなどと、当事者である慧自身さえ信じたくない現実なのである。

「まあ、その辺にして、夕飯にしようぜ」

「誰のせいで怒ってると思ってるんですか、まったく」

憤りながらも、せっかく買い揃えてきた食料を冷蔵庫にしまいこみ、しかたなくダイニング

のテーブルにつく。

「今日は翼のリクエストでミートソーススパゲティなんだ。まだあるから、たくさん食べろ」と有馬が喜々として副菜のサラダやスープを給仕きゅうじしてくれる。

「それはそうと、もう少し食器棚だなの中とか整理しとけよな。しまってる皿さらがバラバラになってたぞ」

「誰のせいだと……」

同じセリフを二度言いかけ、慧はそれに気づいて口をつぐむ。

その原因の一つには、むしろ有馬が関わっている。

彼が不定期にいりびたってキッチンを荒あらすせいで、結局週決めだった家政婦には辞めてもらうしかなかったのである。

が、有馬が食事を作ってくれるのは気ままにやってきた時だけ。その他の日は当然オハチが自分に回ってくるので、慧はこれまたたいそう迷惑しているのだ。

「あんたのせいで家政婦さんがいなくなっただんですからね。少しは反省してるんですかっ」

年下の慧にこてんぱんにやられても、感じているのかいないのか、有馬は眉一つ動かさない。「あゝしてるしてる。海より深く反省してるって」

「ぜんぜんしてないでしょうがっ！」

「そう怒るなよ。一人で飯作って食うのってわびしいじゃんか。それに一人だと張り合ひなく

て作る気しねえんだよな」

「だったら、真理子さんのところでご馳走になればいいじゃないですか」

真理子というのは、現在有馬が住んでいる賃貸マンションのオーナーである。

有馬の親友である橋本祐介の姉である彼女は、現在は結婚して警視庁捜査一課で警視を務める遠田氏の姓を名乗っている。

祐介とともにマンションの一階部分にあるカフェレストラン『緑風堂』を経営している彼女は、なかなかの美人の上にお料理上手なのである。

「そういえば、真理子さんがまた翼連れて遊びにいらっしゃって言ってたぜ」

「話を逸らさないでください」

「お、翼、もう食い終わったのか。おかわりするか？」

「うん」

「有馬さんっ!!」

まともに取り合おうとしない態度に激怒し、思わず椅子を蹴立てて立ち上がった慧を見上げて、翼がぼつりと一言。

「おぎょうぎわるいよ、兄ちゃん。せっかくこくちゃんが作ってくれたんだから、先に食べなよ」

「……………はい」

八歳の弟に真顔でたしなめられ、返す言葉もなく慧はフォークを取ってスパゲティを口へと運ぶ。

ぐうの音も出ない様子に、有馬が腹を抱えて受けているので、あとで覚えていろよ、と内心物騒なことを考える。

「うまいか？」

「……………ええ、まあ」

おいしいです、とぼそぼそと一応礼を言うと、有馬は頬杖を突いて満面の笑みを浮かべた。「いやいや、いつも慧くんには夜のおかずになってもらってるからな。たまに飯くらい作ってご恩返しをしないと」

と、翼の前でいきなりとんでもないことを言い出すので、慧は全身の毛が逆立つような思いをさせられる。

案の定、翼はフォークをくわえたまま、不思議そうに首をかしげた。

「? おかずって、なに？」

「ん? 俺はな、翼の兄ちゃん見て白いごはんが何杯でも食えるってことさ」

「子供に嘘教えるなら、出てってもらいますよっ!？」

そんなこんなで騒々しかった夕食も終わり、翼を連れて風呂からあがると、有馬はいつもの

ようにダイニングのテーブルでルーペやらフィルムやらの仕事道具を広げていた。

フォトジャーナリストである彼は、仕事の依頼があればカメラ片手に日本中をあちこち奔走している。忙しいのなら無理して来なければいいのに、いつも思うのだが、有馬は仕事の合間を縫うようにしてひんぱんに自分の元を訪れる。

それはやはり、会いたいから、顔を見て声が聞きたいからなのだろうか。

そう考えかけ、慌てて首を横に振る。

以前関わった事件絡みで、十一年前に偶然自分がリーディング能力で命を救った少年が有馬であることを知った慧だけに、彼が仕掛けてくるちょっかいは命の恩人という感謝の気持ちを恋愛と取り違えていると冷静に思うのだ。そう、まるでいたずらのようなもので恋愛慣れしていない自分をからかっているだけなのだ、と。

そう自分に言い聞かせているのだが――。

「シャワー浴びていくんでしょう？ 洗面所にタオル用意しましたからね」

すんなりとこんなセリフが口から出るまでには、むろんかなりの紆余曲折はあった。

しかし、なにを言っても馬の耳に念仏、暖簾に腕押し、糠に釘男である彼には無駄だったし、洗面所には有馬が自分でコンビニから買ってきて勝手に持ち込んだマグカップと歯ブラシ、それに棚の上には着替えのTシャツや下着などがその存在を主張し幅をきかせている。

が、しかし！ 食卓をともし、風呂には入れてやっても、有馬の寢床はリビングのソファ